

## 教職をめざすみなさんへ

### 「教師とカウンセラー」

文学部人間関係学科

講師 石川 須美子

私が大学の教員になり、「先生」と呼ばれる立場になって、もうすぐ5年がたとうとしています。しかし、私自身は教師という職業には全く懂れず、むしろ教師という職種を毛嫌いしていた人間でした。なぜなら、思春期時代の私にとって教師は“ウザい”存在であったからです。スカートの長さ、前髪の長さなど「服装の乱れは心の乱れ」と細かい注意をよく受け、「外見で人を判断するな」と、良く耳にするフレーズを言い返していました。そして、成績が下がると勢いを増して教師からの注意が増えてくる…。受験の時期には反抗期もピークとなり「先生の言うことを聞かなくても、成績の良い高校には受かる」と啖呵を切り、授業中はマンガを読み、家で隠れて猛勉強したものです。

思春期時代の私にとって教師は、社会で生きていける人間を育てるという名目のもと、社会に疑問を抱くことや敵対する思考を、根拠なく押さえつける存在だと感じていました。思春期時代に葛藤を感じる大人社会の代表が、私にとって教師であったのでしょう。

私も「先生」と呼ばれる存在になり、就職や進学など、将来について悩む学生に、社会的な常識を解き、いわゆる大人の意見を言うようになりました。そして、「それが社会なんだと」、あんなに敵対していた社会を受け入れて、身をゆだねてしまっている自分に気付かされます。しかし、その一方で、思春期時代の私のように、いわゆる大人

の意見を受け入れられず悩み・葛藤している学生たちの姿を眩しく感じ、今、彼らが感じる葛藤を大切にしたいとも思っています。

私が出会ってきた先生方も、子どもの視点と大人の視点で物事を考えながら、子どもの将来を真剣に考え、子どもと向き合っておられたこととします。

大学生・大学院生時代には、私にも一生の師と仰げる恩師との出会いがありました。研究・人生の方向性で悩んだ時に、そして今も教を請うために先生の研究室に伺っています。そんなときに、先生は紅茶を一緒に飲みながら、話を聞いて下さいます。けして何かの方向性を明確に指示されることはありませんが、客観的な意見や個人的な意見など多面的な考え方を教えていただけ、なぜか先生とお話しした後は、自分なりの答えが決まっています。恩師との出会いを通じて、私は心から尊敬できる恩師の存在が、大人になってからも、生きていく上で非常に心強い存在となるというように感じようになりました。

私は今、カウンセラー（臨床心理士）として働いています。この道を目指すとき、良いカウンセリングとは何かを学びました。

良いカウンセリングとは、カウンセリングが終了した時に、1) クライアント（カウンセリングを受ける人）がカウンセラーのおかげで治ったと思わずに、自分で自分の問題を解決したと思うこと。そしてその時に、何をしてくれたか良くわからない人（カウンセラー）がいたな、という程度に思われること、2) その後、クライアントはカウンセラーの存在自体も忘れてしまえること、ということでした。そのため、カウンセラーは感謝されるべきではなく、クライアントから「先生のおかげで良くなりました」と感謝された時には、あまり良くないカウンセリングをしたと反省するようにと教えられました。

カウンセラーも教師も同じ対人援助職ですが、私は教師とカウンセラーの違いの一つはここにあ

ると感じています。カウンセラーは当事者にとって忘れられゆく存在であり、忘れられるような心理的支援を行います。しかし、教師は子どもの心に残り続け、生涯にわたって生きていく道しるべとなり、心の支えとなり続ける存在だと思えます。そして、そのような存在となるべく教育的に子どもたちと関わります。

カウンセラーと教師、子どもにとってどちらかが大切という問題ではなく、それぞれ違う役割を持っているのだと思えます。私は、忘れられゆく存在を追求しようと、今もまだ学びの途中です。ぜひ皆さんは、子どもの心に残り続ける存在としてのあり方を今後も追求し続け、より多くの子どもたちにとって、良き道しるべとなってほしいと思います。

## 学校教員に求められること

食物栄養科学部食物栄養学科

教授 松本比佐志

教員から受ける言葉が学生（生徒）の心に深く刻み込まれることがあります。私の中学校時代、地理の授業で「日本地図に山脈を示せ」という課題がでました。同級生は線で塗りつぶしましたが、一部を海に広げて書いたのを先生は見逃しませんでした。「山脈というのは陸地についた名称である」。この一言で、言語に対する認識の甘さというものが私の脳裡から消えていったように感じました。高等学校での思い出は、体育祭の出来事です。練習で何回やってもうまくいかない組み立て体操が体育祭の当日には各グループが失敗することなく成功したのです。成功後は友達とともに感激し、先生方からも褒めて頂き、自分達の可能性というものを信じることができました。

このように健全と思われる学習体験が完結するためには、教員は学生に受け取りやすいメッセージをタイミング良く発信する努力が大事ですし、学生自身は教員との交流の中で何かをつかむ感受性を持つことが大切だと思います。メッセージを送る側と受取る側の協同作業の過程の中に教育の真髓があり、その達成のためには両者の信頼関係が欠かせないと思います。

しかし、近年の学校教育を取り巻く社会情勢は、国際化、科学技術の発展、高度情報化、少子・高齢化、価値観の多様化など、従前に比べ大変劇的な変化を遂げており、それらの事柄が複雑に絡み合っています。そのため、学生のみならず教員は自身がまるでクモの糸に絡まった小さな昆虫の如き印象を受けていることでしょう。

その現状を打破・改善するためには、それらの複雑に絡み合った事象を解きほぐし、整理して本質を見出していくこと、多くの情報の中から必須の情報を取捨選択する作業が必要になります。近年では、教員として対処・決断すべき要素が必然的に多くなり、また、その対応にはきめ細やかな神経が求められています。しかし、そのような状況であっても課題の整理や取捨選択作業が機能しているならば、教育の根本は今も昔も不変ではないかと考えられます。

教育とは、学生に確かな事柄を教え、伝えることから始まり、学生がそれを受け取り、心にきざみ、育んでいくとともに、教育者自らも教えることを通して学ぶ過程を含んだ言葉だと言えます。教えるには、まず時間をかけた教材研究が欠かせません。授業計画は用意周到な準備が必要です。また、これ以外に、教員と学生との間で良好な意思疎通がはかられていることや、学生の習熟程度の理解などが大切な要素であります。同時に教員は学校運営に必要な校務を併せて担っております。

それらを考慮すると大学生による3週間の教育

実習はひと時の現場体験に過ぎないと言えるかもしれませんが、それも教育者としての貴重な一里塚となる経験であります。

NHKの教育番組（平成23年12月）で米国コロンビア大学のアイリンガー教授が「選択」の重要性を語っており、日々の行動の中でどのような選択をするかを記録し、選択後の行動の結果を分析することが大切だと述べていました。その選択が経験へとつながり、それがさらなる選択へと導いてくれるからです。選択は経験という言葉とセットになって起こる事柄であります。教育現場にかかわらず、ヒトは何らかの課題を対処する際に選択、次いで決断が求められ、それが経験につながります。「決断をしない」ということも決断という範疇に入りますから、決断は選択に付随する事柄にあたります。また、新たな課題に対して蓄えた経験が大いに役立つことは否めないことです。「備えあれば憂いなし」ということわざがありますが、「備え」とは、より良い選択・決断を可能とさせる経験に基づく事象であります。そのような経験を多く蓄えることで、より良い選択をできるということが期待されます。

教育実習などの経験を積んで教員免許状を取得し、さらに教職を志望・選択された皆さんは、たゆまざる情熱を持って本採用を目指して精進して頂きたいと思います。皆さんに贈る言葉は、上杉鷹山の「為せば成る、為さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬなりけり」であります。夢は必ず叶うものと言う言葉を胸に秘め、頑張ってください。

## 教職を目指す君たちへ

国際経営学部国際経営学科

教授 中山昭則

『私は今日までは勉強（学問）を導く先生でしたが、今からは単に「先に生まれた」という意味での先生になります』。

高校教員時代そして今も研究室の学生には卒業式の日にこのように言っております。教職を目指す皆さんへ、私の拙い経験が教職という職業観を考えて頂く一助になればと考えペンを執ります。

君たちがもし念願を果たせたならば…、世間様は君たちに対して決して“教士”つまり「教えるマシン」になることは望んでいない筈です。例えば、自販機でジュースを買おうとしたが肝心の商品が出てこない。この場合もしかしたら君は「このヤロー」と言って自販機を蹴っ飛ばすであろう。それは自販機が「モノを言わないマシン」だから…。これは「校内暴力」の構図と似てはいないだろうか。また、コンビニの空間は「必要とされる品が必要な量だけ整然と並べられている」のでとても判りやすい。しかし、お客さんは無言で店にやってきて買い物を済ませたら無言のまま出ていく。学校をこのような空間にしてはいけない。以上のことから、教員は決して「安定しているから」という理由だけで目指すべき職業ではないことは理解できよう。

さて、君たちを待ちうける最初の難関は「教育実習」であろう。君たちはこの実習をどのようにイメージして臨むのか。私が教員の時は実習生に「君は生徒に教えてもらいなさい」と言って教壇に送り出し、2週間で12時間程度は授業を持たせていた。しかし、生徒の方がしたたかである。実習生には何一つ言わない。しかし、放課後あるいは実習生が大学に戻ると、生徒は文句タラタラ言

いに来る。お陰で2週間分全部やりなおしたことも何度かあった。事前学習は本当にしっかりとやってください。

高校の担任になると、3年生の4月から5月にかけては結構きついことが多い。生徒たちにとってこの時期最も大切なのは“部活”である。君たちだって経験しているだろう。選手になれるのか否かが決まる時期なのだ。同じ練習をしても力量の差が生じるという惨い現実がある。受験の明暗は勉強量の差なので納得できるが、部活は違う。その結果、選手となった友人の人格や性格に対する誹謗という形になることも多い。そして、教室は「よそよそしくなる者」「苛立つ者」「私と目を合わせなくなる者」「はしゃぐ者」…、安堵と落胆が交錯する空間となるのだ。友人に囲まれながら泣きじゃくる生徒の光景は見ると辛い。しかも泣きじゃくる生徒は何も選手になれなかった者ばかりではない。選ばれた生徒だって辛いのだ。

教師にとって教え子の死ほど辛いものはない。耐えがたい悲しみであり私も経験している。最も辛かったのは尊い教え子を白血病で亡くした時である。それが判明したとき母親は職員室で号泣してしまっただけでなく、学校の帰りによく見舞いに立ち寄った。元気な時もあれば「無菌室」に入れられ近づけない日もあった。何とか登校してきたとき豹変したその子の姿に級友たちは息を飲んだ。しかし、皆普段通りに接していた。彼女の告別式の帰り路でその子たちに「るっちゃん（無くなった子のこと）白血病だったんですね。みんな知っていましたよ。」と言われたとたん、私は教え子たちにもたれ掛かって泣いてしまった。君たちが望む教員生活は時としてこうした現実と直面しなければならないとの思いから敢えて書かせて頂いた。るっちゃんからの手紙は私への「励ましのエール」として大切にしている。

一方、生徒は私たち教員に大きな夢をプレゼントしてくれることもある。私がもらった最高のプ

レゼントは「甲子園出場」だ。この年勤務校は下馬評にも拳がらずノーシード校として出場した。しかし、どんどん強くなりとうとう甲子園にまで行ってしまった。甲子園での応援は感動ものだ。しかも“あの生徒たち”がプレーしている。泣かないわけにはいかない。しかし不思議なものだ。野球に限らず「強い時の生徒は授業中寝ない」のである。弱い時の方が寝る子が多い。恐らく集中する体力がないのであろう。

“真理の探究”を知らない先生は、いくら知識があっても実は「何も知らない先生」と言うことになる。その真理の探究の最大の糧はリベラル・アーツ、つまり一般教養である。専門知識だけの教員は何れ職員室での居場所が無くなる。「誰も相手をしなくなる」のである。

君たちに説く!!「酒が強いことしか自慢できない学生にはなるな」「自分に対する投資は惜しむな、借金してでも読書と旅はしなさい」「妥協で自分の能力を決めるな」。

“立て看板”一つない綺麗なキャンパスで日々を送る諸君、『君はいったい何者だ』と問われたらどうする？

先生というのは実は『人格』そのものが教材となってしまう（されてしまう）ことが多い職業でもある。

頼むから本は読んで欲しい。「分厚い本を持ち歩き中庭の芝生の上で寝転がって読んでいる学生」がいないのは一体どういうことなのか!?

取りとめのない話の最後に…、この歳になって思うのですが「昔の自分”が今の自分を後押ししてくれる」ことってあるんですね。そして、その“昔の自分”には先生が寄り添っている場面が多いのです。

この拙い経験談が何かのヒントになれば望外の喜びであります。

ではペンを置きます。

## みなさんの専門性を 小学校に

別府大学短期大学部初等教育科  
准教授 後藤善友

各学問分野で高い専門性を追求してきた皆さんに、小学校教員への道を紹介したいと思います。

皆さんが今専門としている分野へ興味を感じ始めたのは何才くらいの時だったでしょうか。

世界最先端のプラネタリウム「メガスター」をたった一人で作り上げた大平貴之氏は、小学生の頃に星とプラネタリウムに魅せられて以来、周りの人々との関わりの中でプラネタリウムへの情熱を膨らませていった体験を著書「プラネタリウムを作りました」の中で記しています。皆さんの多くも小学生の頃の体験や環境をきっかけに専門分野への興味を深めていったのではないのでしょうか。

子どもがあることに興味・関心を持ったときに、対象への探求が深まり広がっていくためには、興味・関心のレベルに合わせ、少し先の面白さが見えるように、しかし子どもの探求の楽しみを奪わない支援が求められます。この支援には教員の情熱が必要です。そしてこの情熱は、皆さんが専門分野へ傾けている情熱と根源が同じです。というのも、深く学ぶことによって得られる感動や楽しさを知っているからこそ、子どもたちをそこに連れて行くことに情熱的になれるからです。だから、専門分野への情熱がある人は小学生と関わるに相応しい素質を持っていると思います。

もちろん、小学校では専門分野だけを通して子どもと関わるわけではありません。しかし、自分の専門分野に情熱を持って深く学んでいる人は、他の分野においても少し深いところに必ず面白いものがある、ということを直感的に確信しています。この確信によって、皆さんは他分野にも勇敢

に進んで行けます。その皆さんの姿もまた子どもたちに伝えてほしいものの一つです。

別府大学短期大学部専攻科初等教育専攻では、2年間で小学校教諭一種免許状と幼稚園一種免許状を取得できます。これまでは短大で初等教育もしくは幼児教育の学科を卒業することが受験資格でしたが、平成22年度からカリキュラムが拡充され、中学校及び高等学校の教員免許を取得見込の人も受験できるようになりました。しかも、別府大学の在学生在が初等教育専攻を受験し入学する場合は全員に学費減免制度が適用されます。このように、皆さんが別府大学で生活環境を大きく変えることなく小学校教員免許を取得できるように支援制度が充実しています。

現在、小学校の教員採用数は急速に伸びています。平成23年12月には、これまでの小1年に加え小2年でも35人学級化することが政府から発表されたほか、特別支援学級の希望者の増加に対応するため、小学校教員の採用増の傾向はしばらく続くことが見込まれています。

例えば大分県では平成24年度の小学校教員採用数が前年度よりプラス20名の86名でしたし、来年度は更に採用数増が予定されているそうです。このような状況を活かして初等専攻の卒業生も次々と採用試験に合格しています。今年度は8名の卒業生から合格の連絡がありました（大分県3人、熊本県1人、沖縄県2人、福岡市1人、北九州市1人）。

これまで専門分野の研究と、その専門性を活かした中・高の教職を目指してきた皆さんにとっては、小学校教員への進路という話は少し唐突に感じるかもしれません。しかし、皆さんのその専門性と、専門分野への情熱は、小学校教員として皆さんが活躍する際に大きな力となります。

一方、小学校現場では情熱のある教員が求められており、その採用数も年々増加しています。皆さんが将来活躍する姿の一つとして小学校教員という選択肢を加え、一度検討してもらえることを期待しています。